第 12 回講義（文化）　　2023 年 7 月 29 日

オリンピックの光と影

読売新聞編集委員　結城　和香子

１、はじめに

■選手の活躍が伝えている何かにも目を

私は記者人生の大半をオリンピックとパラリンピックの取材に費やしてきました。その中でいろんな体験をしましたが、本当の担当は、表舞台の裏側にある国際政治、つまりスポーツ政治のほうです。国際オリンピック委員会やパラリンピック委員会などの取材を通じ、ドーピングや招致にからむ疑惑など、オリンピックの闇の部分も軸のひとつとして見てきました。このうん十年、オリンピックの光と影をずっと見てきたということです。本日については、楽しい話もしてくれと言われているので、明るい話を中心にお届けしたいと思います。オリンピックの明るい部分と言えば、言うまでもなく選手たちの活躍する姿でしょう。ただ、「オリンピックって何だろう」「闇の部分も含めてどう捉えたらいいんだろう」と考える時、選手たちが活躍するまでに至る過程や、活躍が伝えている何かにも目を向けていただきたい。それが今日の話の主眼でもあります。

２、オリンピックのルーツ

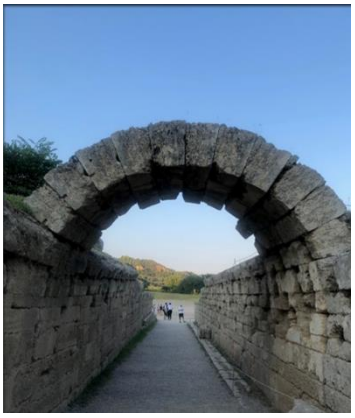
１）古代オリンピック

■戦争や感染症の解決策として始まった

スポーツは人間が発明した中で一番素晴らしいものだという研究者もいますが、そのスポーツの祭典であるオリンピックというものが何でこの世にできたのか。オリンピックを開くということは社会にどのような影響を与え得るのかを考えていきたいと思います。

左の写真（IOC 提供）は太陽から凹面鏡を使って聖火の種火を採火しているシーンです。場所はギリシャのオリンピア。古代オリンピックの開催地です。その下の写真は競技場に入って行く入口で、私が先週撮りました。ここで毎年、オリンピックに関する国際セッションが開かれていて、私は今回、日本オリンピックアカデミー副会長の立場で参加しました。現地は 40 度超えの猛暑でした。

記録などによると、古代五輪は BC776 から AD393 まで開かれていました。1169 年続いていたということになります。近代五輪はまだ 100 年ちょっとですから、ものすごい息の長さです。ギリシャのアテネやスパルタなどの都市国家（ポリス）では、身体を鍛えることが非常に重視されていました。さらに社会的な地位の高い人については、身体だけでなく、知識や芸術など内面を高めることも求められました。そのころは都市国家の間で戦争が絶えず、さらに疫病もはやっていました。そこである王がギリシャの北方にあるデルフィという神域で、その解決策について神にお伺いをたてたところ、4 年に 1 回、スポーツの祭典を開けとのご宣託があったというのが発祥伝説です。戦争とか感染症は、今日の私たちの社会とまるで同じですが、その対策のためにギリシャ全土の都市国家を集め、その時だけ戦争をしない盟約を結び、選手たちが集って競技していたのです。



行われていたのは全裸でのかけっこやレスリング、あるいは目を突くこと以外は何でも許されるパンクラティオンという競技もありました。ギリシャの都市国家では男性の地位が高く、社会活動にも男性

しか参加していなかったので、女人は競技も見物も許されず、発覚したら死罪だったそうです。

オリンピアの競技場の隣には、最高神であるゼウスの神殿があり、そこには 12 ㍍以上もある巨大なゼウスの座像があったといいます。選手たちは鍛錬を重ねて能力を高め、神になるべく近づこうと努力し、その努力によって神を讃えるという考え方でした。競技では銀メダルや銅メダルはなく、優勝者だけが栄誉を手にし、オリーブの冠を与えられました。そして都市国家に帰ると英雄として祀られ、働かなくても一生過ごせるだけの物資を与えられた。するとやがて、それを求めるだけのプロのような選手や、不正を働く選手も現れるようになったそうです。古代五輪も一筋縄ではいかなかった。人間のすることというのは、だんだんとほころびが出てくるんですね。不正を働いた人は巨額の罰金を払わされ、それを使ってゼウスの等身大の銅像が作られ、競技場の入り口近くに並べられていたそうです。

■戦争のために中止されたことはなかった

五輪期間中の休戦協定は、小競り合いが 2 回あったのを除いてずっと守られ、オリンピックが戦争のために中止されたことは 1 度もなかったそうです。それに引き換え 100 年ちょっとの近代オリンピックでは、すでに夏季五輪だけで 3 度、戦争で中止になっています。

2）近代オリンピック

■失敗にめげず開催にこぎつけたクーベルタン

近代オリンピックの父と言われるフランス人のピエール・ド・クーベルタン男爵は、遺言で自分の心臓を古代五輪が開かれていたオリンピアの地に埋めてほしいと言ったそうです。彼が 30 代くらいのころ、オリンピアの地がドイツの考古学者たちによって発掘され、古代五輪の全容が分かってきてヨーロッパ中で話題になりました。当時、スポーツを通じた人間教育は素晴らしいと考えていたクーベルタンは、世界の選手が参加するオリンピックを、各国が持ち回りで開催できないかと思いつきました。そして、国際会議を開いて演説したり、デモンストレーションを繰り広げたり、ギリシャのデルフィで発掘された神への賛歌に曲をつけて披露するなど、五輪復活のためのさまざまな工夫を展開しました。最初は失敗しましたが、彼は訴え続け、1894 年にパリで開いた会議で賛同を取り付け、国際オリンピック委員会を作りました。その 2 年後にアテネで第 1 回大会を開こうとした際、当時内戦などで疲弊していたギリシャは返上を申し出たのですが、クーベルタンが必死で説得して開催にこぎつけたのです。出場してもらう選手をかき集め、イギリス大使館員や旅行者などが参加したりしたそうです。

オリンピアにある
クーベルタン記念碑

■女性の参加には最後まで反対

クーベルタンはその後、IOC の第 2 代会長にもなり、オリンピック運動を徐々に大きくしていきましたが、彼は最後まで女性の参加には反対でした。当時のヨーロッパでは、上流社会の女性が肌を出して運動なんかしてはいけないという風潮でしたし、古代五輪の系譜ということを考えたのかもしれません。今回ギリシャに行った際、フランス人の大学教授と話をしていてクーベルタンに触れたところ、「フランス国内では近代オリンピックの父であるクーベルタン男爵をたたえることに対し、微妙な反応があるのです」とおっしゃいました。女性に対する偏見を持ち続けていたということが、今のフランス社会では是とされないんですね。クーベルタンは亡くなる前年、「オリンピックというのはまだ完成していない交響曲である。それを完成させるのは未来世代のあなた方だ」と言いました。その交響曲が今やどうなっているのかについては、みなさんのご判断にお任せします。

３、五輪開催と社会

■トップ選手の雄姿に私たちは何を感じるのか

オリンピックを開くということが、私たちの社会にとってどんな意味を持ち得るのか。スポーツの力というのは何だろう。そのあたりを考えながら選手の活躍などに触れたいと思います。ソフトボールの

上野由岐子、車いすテニスの国枝慎吾、水泳の池江璃花子、スケートボードの堀米雄斗といった選手たちの雄姿を見て、私たちが何を感じるのか、考え方は変革するのか。それがある意味でスポーツの力と言われるものの第一歩です。

■「メダルが何の役に？」が伝えた羽生の思い

例えば羽生結弦です。彼が最初に金メダルを獲った 2014 年ソチ五輪での記者会見で驚いたことがありました。本命だったカナダのチャン選手が失速し、羽生が金メダルを獲得したのですが、会見で彼は金メダルを見て、「このメダルが何の役に立つのでしょうか」と言ったのです。その後羽生に聞いてみて、その意味がだんだん分かってきました。羽生選手は仙台で東日本大震災を体験しています。スケートリンクで練習している最中に地震が起きました。リンクは波打ち、スケート靴が落ちてくる。ほうほうの体で外に飛び出し、家族を避難所で探し当て、おにぎりを分け合って食べた。彼は「これはどうなっていくんだ」と不安に苛まれます。スケートの練習なんて頭をかすめなかったそうです。でもしばらくして、周りから「あなたはフィギュアスケートの選手なんだから練習してほしい」「スポーツでみんなに何かを届けてくれたら」と言われアイスリンクに戻って行くんです。「こんなことをしていていいんだろうか」「何かの役にたつんだろうか」「食料を届けられるわけでも、仕事を与えられるわけでもない」と自問自答しながら。でも羽生は「自分にできるのはフィギュアなんだから、それによって何かの足しになるんだったら一生懸命やろう」と思い直し、カナダのトロントに渡って必死に練習し、どんどん力をつけていきました。

■「感謝」と「スポーツの力」が招致のテーマ

そしてオリンピックの舞台に立ち、金メダルを獲った。でもいざメダルを手にしてみて、「これで被災地の人たちを助けることができるんだろうか」との思いがよぎり、記者会見のあの発言になったのですね。私の隣にいたアメリカの記者はいつも非常に辛辣なんですが、羽生の発言に「19 歳がそんなこと言うかなあ」と感動していたのが印象的でした。羽生の思いは、われわれのような記者にも伝わってきたんです。彼は怪我を押して戻っていった平昌五輪で、痛み止めを打ちながら 2 つ目の金メダルを獲得しました。こうした彼の系譜を見ていると、自分だけのためにフィギュアをやっているんじゃないのだろうなと思うんです。彼は仙台に帰るといろんな形で人々と触れ合います。みんなに何かを伝えたいという気持ちでそうしているのだと思います。東京 2020 を最初に招致した時の大きなテーマは、羽生の思いと同じだったんです。何もなくなってしまった被災地に、世界中のスポーツ界からさまざまなモノや激励のメッセージが届けられました。そういったことへの感謝や恩返しと、もう一つ、世界中で苦労している人たちにスポーツの力を届けようというのが招致の目的でした。その招致活動に対して IOC や関係者が大いに感動して東京を推してくれたというのは一つの事実です。

■世界が感動した日韓選手の友情

スポーツの力を示すもうひとつ事例を紹介しましょう。2018 年平昌五輪のスピードスケート女子 500㍍。小平奈緒が優勝した際、敗れた韓国のイ・サンファが小平に近づいてきたので、小平が何かを言ったらイ・サンファが小平の肩に顔を寄せて泣いたんですね（右の読売新聞記事）。スピードスケートは息の長いスポーツですから、2 人はライバルとして長い間しのぎを削ってきました。どちらかが負けるともう一方が慰めたり、一緒に食事をしたり、タクシー代を貸してもらったりする友だちでもありました。お互いにどれだけ切磋琢磨しているかを分かりあえる、唯一無二の関係だったのです。ライバル同士の友情というのは、不思議ではあるもののとても深いのです。イ・サンファは韓国では女王として君臨してい

央選手の涙
金メダルの
。
抱き留め、
〈やった〉、
シャーの中
と語りかけ
平が不調だ
いてくれた
は分からな
めることの
さを一番理
るのは、長
きたライバ
に、韓国で
なったと聞
みるのか。
勢が自発的

五輪のドラマ 演出は

編集委員 結城和香子

女子アイスホッケーの日本戦で初得点を挙げた韓国・北朝鮮合同チーム（コリア）は、「日本が相手だから、団結できたか」と記者会見で聞かれていた。会場を埋めて揺れ続けライバルという立場も解けていく。小平と李の姿に誇りを重ね、気づきをもらった人々が、世界にどれだけいるだろう。それは本物だからこそ、忘れ得ない一瞬として、私たちを導く力になる。

心の絆の前には、国境も、

スピードスケート女子500㍍でレースを終え抱き合う、金メダルの小平奈緒（右）と銀の李相花（18日、韓国・江陵で）＝守谷遼平撮影

ましたが、平昌では故障上がりで、何とか間に合わせてきたのでした。小平はレース後、韓国語で「よくやったね」と言ったそうです。この 2 人にとっては日韓とか何とかは全くなくて、人間と人間です。この 2 人の姿が、その後の日本と韓国に不思議な影響を及ぼしていきます。韓国のメディアは日本に対して、日本のカーリングチームの人間味のあるエピソードを紹介したり、日本の選手を柔らかいタッチで報道するようになったと感じました。

４、過去大会が目指した社会の変化

■アボリジニ問題に正面から向き合ったシドニー大会

私がオーストラリアのシドニーに駐在していた 2000 年にシドニーオリンピックが開かれました。オーストラリアは、先住民のアボリジニに対する差別など問題が根強い国ですが、シドニー大会はアボリジニ問題に正面から向き合った大会でした。この大会が行われる 3 年前、独立した調査委員会が先住民の同化政策の実態を描いた「盗まれた世代」というリポートを出し、大反響を引き起こしました。幼い子供たちを強制的に母親から引き離し、収容施設で英語や労働を教え、農場などに使用人として出していく、そんな過去の施策の実態を明るみに出す内容です。私が取材した 80 歳くらいのおばあちゃんは突然泣き出し、「私はこの歳になるまで、本当の名前も、母親が誰かも分からないんですよ。出生証明さえない。自分のルーツを何も知らないことがどういうことか分かりますか」と訴えました。収容施設で、アボリジニの言葉を話したとして鞭で打たれ、独房に入れられたそうです。あるいは、隣にいた女の子が真夜中に叫び出し、救急車で運ばれてそのまま精神病院に入れられてしまったことがあり、それが従妹だったことを後で知ったそうです。

■テーマの象徴になったキャシー・フリーマン

そのオーストラリアでオリンピックが開かれることになり、歴史的な差別を直視し社会をより良くできないかという願いを受けて、シドニー大会の主題に「黒と白（先住民と白人社会）の融和」を掲げることが決まりました。大会の象徴となる聖火リレーは、オーストラリア大陸の真ん中あたりにウルル（エアーズロック）と呼ばれるアボリジニの聖地がありますが、ここから出発し、先住民の女性の陸上選手が最初のランナーになりました。当時、オーストラリアは冬に差しかかる時期で寒かったのですが、彼女は素足で赤い土の上を走り出しました。それがアボリジニの伝統だからです。最終ランナーもアボリジニの女性ランナー、キャシー・フリーマンでした（左の読売新聞記事）。彼女は優しいけれども非常に強い思いを持っている選手で、陸上の 400 ㍍で優勝し、オーストラリアとアボリジニの両方の旗を持ってウイニングランをしました。そしてアボリジニの子どもたちに、「私たちはもう自分が誰かを恥じる必要はない。あなたはあなたのままでいい」と語りかけました。彼女はこのオリンピックのテーマの象徴のようになった選手でした。

それでも時のハワード首相は、同化政策を行ってきたことに対し謝罪をしませんでした。謝罪をするとたくさんの補償を出さなければいけないからです。そこで謝罪を求める民間団体が、大空に飛行機で「SORRY」の文字を描いたこともありました。オリンピックが終わって何年もしてから、労働党政権が初めて正式に謝罪しました。その時、国民の代表として国会議事堂に呼ばれたのは、かのキャシー・フリーマンと、白人男性のイアン・ソープ選手でした。2 人はアボリジニの子どもたちのために、スポーツを通じて多くの支援活動をしてきたことが選ばれた理由でした。スポーツも初めは人の心に何かを伝えるだけかもしれないけれど、その種がだんだん大きくなっていくと、社会を動かす力にもなるということです。

５、パラリンピックの転換点

■「Meet the superhumans」

東京大会のパラリンピックは非常に印象的でした。私もパラのほうがいろんなことを教わったような気がします。パラリンピックをエリートスポーツとして捉えていこうとする動きは、2012 年のロンドン大会からだったと言えるでしょう。大会が開催する直前に、全英のテレビ局をハイジャックしてある CF が流されました（左写真）。イギリスのパラリンピックの代表選手たちの練習の姿などを紹介したのですが、選手たちは堂々としていて、「これが私たちの姿。何が悪いの」とタンカを切っているようにも見えました。これがものすごいインパクトを与え、私も記事にしました。

■「Forget Everything you thought you knew about humans」

タイトルは「Meet the superhumans」。「人間を超えた人間に会え」。そういう切り口でこの映像はできています。これを制作したのはパラリンピックの放映権を持っていたチャンネル 4 ですが、その背後にはパラリンピックに何度も出場し、数多くのメダルを獲得した競泳のクリス・ホルムズさんがいました。組織委員会でパラリンピックの統括になっていた彼が、「こうなったら突き抜けよう」と呼び掛けたことで、選手たちがすべて乗ってきて実現したんですね。CF の最後にはこのテロップが流れます。「Forget Everything you thought you knew about humans」。「人間について何かを知っていたと思うなら、それをすべて忘れなさい」。

■「クリスマスプレゼントに車いす買って！」

ロンドンのパラリンピックは、最初こそ「オリンピックを見損なったから行くか」みたいな人が集まったようですが、だんだんその面白さが話題になり、チケットが売り切れる日が続出しました。私が会場に向かっている時に、男の子が「パパ早く。車いす始まっちゃうよ」と言いながらお父さんの手を引っ張っていました。その子にとっては、イギリスのトップ選手がヒーロー中のヒーローで、車いすレースが最高にかっこいいと思っている。「クリスマスプレゼントに車いす買って」というおねだりが結構あったとも聞きました。競泳のエリー・シモンズは小人症ですが、ものすごいいい笑顔を持っています。イギリスでは「愛しのエリー」というニックネームをもらっていて、彼女が出場するとみんな大声援を送ります。これらの選手たちはすべて、競技のこと、内面的なこと、社会のことなど、何でもとうとうと話ができるんです。だから彼らの思いが社会にうまく伝わって、それに触れた人に何かの気付きを与えていくのでしょう。

■「障害がある」「何かができない」はやめてくれ

イギリスはパラリンピック運動の発祥地ですが、パラリンピアンたちに言わせると、意外に偏見があったということでした。ロンドン大会の 3、4 年前には、あのクリス・ホルムズさんが「『障害を持っている人を何でチケットを買って見に行かなくてはいけないんだ』という人がいたんだから」と言っていました。私は障害という言葉をあまり使いたくありません。国際パラリンピック委員会のクレーブン前会長（イギリスの車いすバスケの代表選手）も、「障害という言葉、disability（能力がないの意）を死語にしたい」と言っていました。例えば、機能が失われているのでこの種目に出るというのであれば、「機能障害(impairment)」と言えばいいわけで、「何かができない」という言い方はやめてくれというのが前会長の主張でした。彼だけでなく多くの選手たちも「機能が失われていても工夫をすれば何でもできる。われわれは able、能力があります。disable ではありません」と主張していた。それをわれわれも取材をしながらひしひしと感じました。

カナダでは知らない人はいないと言われる距離スキーのブライアン・マッキーバーは、17 歳のころに視覚障害となりました。五輪代表選手を目指す力を持っていたブライアンに、お兄さんのロビンが「俺

がお前のガイド役になってやるから、視覚障害の種目があるパラリンピックを狙おう」と言いました。ガイドというのは、後ろで滑るパラ選手より能力がないと務まらないので、「ブライアンのガイドになれるのは俺しかいない」というのがロビンの思いでした。彼自身は長野五輪に出場した直後で、躊躇なく弟のガイドとなり、そしてチームのコーチにもなり、ずっとパラリンピックに関わっていくのです。

■違いが違いではなくなるということ

ある時私は、ブライアンの表彰式のあと彼をつかまえて、もう少し突っ込んで話を聞いたことがあります。「あなたにとって障害って何？」と聞くと、「例えば、人は年齢を経ていくと体のどこかが動きにくくなりますよね。外から見ても分からないけど、身体や心に病気を持っている人もたくさんいる。しかしそうなっても、さまざまな試行錯誤をしながら、痛みや辛さに付き合って生きていく」「僕らの障害もそれと同じ。視覚障害というのも自分のあり方なんだから、付き合って生きるしかないんです」「僕らは自分を障害者とは感じていません。もっと見えればいいと思わない日はありませんが、そういう部分も含めて自分が好きなんです」「そういうことも含めてすべてを笑い飛ばせるような社会ができたら、それはとってもいい社会だと思うよ」などと答えてくれました。ブライアンが出ている大会では、私は必ずいつも会いに行きますが、彼の思いや心情は全く変わりません。障害があろうとなかろうと、人間としての生き方は変わらない。それに気付いたら、違いというものはある意味でもう違いではなくなる、ということですね。

■他者への偏見をなくせば生き方の覚悟が変わる

東京のパラリンピックの時に、「共生社会」とか「多様性」とか盛んに聞きましたが、その本当の意味はどういうことでしょうか。例えば、自分が車いすになった時に人には見せられないと感じたとしたら、その人自身が車いすや障害に対して偏見があるということになる。でも「車いすでもいいじゃないの」「工夫をすればできる生活がいっぱいある。旅行にも行ける」「恥ずかしいことでも何でもない」と思えればいい。他者に対する偏見をなくせば、回り回って自分の生き方への覚悟が変わってくるかもしれません。それが豊かに生きることを模索することになると思う。障害者問題というのは実は全体の話なのではないでしょうか。いずれ私たちはそれに思い至るのではとも感じています。

６、東京大会の曲折と逆境の中の希望

■「スポーツなんかやっている場合じゃない！」

東京大会はオリンピック史上初の延期となりましたが、組織委員会とかはそれはもう大変でした。契約から何から何まで全部見直して、やり直さなければならなくなり、これに最初の半年くらいかかったそうです。そして世論はと言えば「もう中止したほうがいいんじゃないか」「スポーツなんかやっている場合じゃない」「1 年くらい延期したってコロナは収まってない」と傾いてきました。

無観客の中で開かれた東京大会の開会式
右は組織委員会の橋本会長（IOC 提供）

延期をしたことで国際スポーツ界もものすごく大変でした。例えば陸上の世界選手権も 1 年延期されましたが、これも再契約などすべてやり直しです。ほかの競技も事情は同じ。ピラミッドの頂点のオリンピックが動くと、すべてが動かなくてはいけないのが国際スポーツ界です。選手も振り回される。選手村の問題もあった。一つ一つお願いして、1 年後への仕切り直しをする。気の遠くなるような作業の連続です。

これが 2 年延期となると、冬のオリンピックの年になってしまうし、選手の世代も変わってしまいます。国際オリンピック委員会も組織委員会もその辺を分かっていて、「とても難しい」という言い方をしていました。それでも世論は「せっかくのオリンピックをコロナの中でやらなくてもいい」となります。

人々からすれば当たり前の考えです。そして延期論も含め、7、8 割が今のオリンピックに反対となり、国際的な報道でも「日本国民の 8 割が反対しているのに強行している」という話になっていったのです。ちょっと残念な流れでした。

■コロナ最悪状況下での開催シナリオを採用

感染症対策については、国際オリンピック委員会の調整委員長であるジョン・コーツ副会長にインタビューした時、4 つのシナリオを準備していたことを明らかにしました。最も楽観的なのはコロナが収束して日常が戻った時に開催、最も厳しいのは状況が更に悪くなった時に開催というものでしたが、結局、採用されたのはこの最悪のシナリオでした。もちろん、1 年待った間にいろんな知見が積み重ねられ、どのようにすれば曲がりなりにも大きな大会が開けるかということが分かってくる。オリンピックに先立つ各種大会の経験値もある、1 年待ったことは無駄ではなかったと。ただ、コロナの流れだけを見たら、ピークの直前にオリンピック、ピークにパラリンピックが来たということでした。

全部が終わった後で、「オリンピック、パラリンピックはコロナ禍にどう影響を与えたか」という検証が行われました。その中に、大会中に 1 人の人が何人にうつしたかというグラフがあったのですが、オリ・パラの直前から人にうつす率がぐんと減っているんです。もっとも、感染者数は後でずれてきますから、波自体はオリ・パラの時にどんと来た感じに見えましたが、感染者の広がりはうんと低くなったという事実があったのです。また終わった後のアンケートでは、オリンピックは 6 割、パラは 7 割の人が「開催してよかった」と回答しています。もっともその後、汚職、談合事件が発覚しましたから、改めてアンケートを取ったら結果は異なるかもしれません。

■「子どもたちには観てほしかった」

それにしても残念だったのは観客の断念でした。これは「中止しろ」の声の中で、最善の策をとるからということで決まった方策でしたが、オリ・パラをよく知る側からみると、とても悲しいことでした。錦織が出場したテニスの会場に取材に行くと、「パコーン、パコーン」「ラブ・サーティ」「ミーンミンミンミン」しか聞こえません。シーンとしたテニス会場に鳴り響くセミの大合唱。かなり暑い中で、大合唱だけを聞きながらよく集中力を保ったものだと思います。錦織に「無観客どうだった？」と尋ねると、「慣れれば何とか集中力は保てた」と前置きしてから、「でも子どもたちには観てほしかったなあ」と残念がっていました。

■東京大会は日本社会に何かを残せたか？

日本中が沸いたラグビーのワールドカップの会場では、ものすごい大観衆が一斉に「ウワーッ！」と叫んで選手たちを讃えました。オリンピックでは本来、これがもっと大きく起きるんです。選手が大きなことを成し遂げたり、その選手にとって最後のレースだったりすると、1 人の人間のためにものすごい歓声や拍手が沸く。そんな瞬間を「オリンピックの魔法」と言いますが、魔法が生まれる時には必ず大観衆との心の繋がりがあるんです。選手がやったことに心を打たれて拍手をし、大きな声を出す。われわれメディアはそれを報じているんです。「パコン、パコン」ではなく、ものすごい掛け合いを報じるから、テレビを観ている方々にも魔法が少し伝わるのだと思います。それが東京大会では一切なかった。空っぽのスタジアムでの閉会式で聖火が消えていくのを見ながら、「日本の社会に何か残せたかなあ」と思ったら泣けてきました。1964 年の東京大会を観た人は何かを必ず覚えていますよね。「アベベが白い靴を履いて走って行ったよ」だけでもいいんです。その時があったよという共通の記憶として残っています。じゃあ今回の東京大会で何かありますかということですね。

7、選手たちが伝えたもの

■敗れた韓国選手がウルフの手を高々と掲げた

それでも光の部分は確かにあったと思います。たくさんの歓喜や笑顔がありました。たとえば柔道 100 ㌔級のウルフ・アロン選手。お父さんがアメリカ人で大学の先生、お母さんが日本人。日本は柔道をお家芸としていますが、100 ㌔級は海外の選手の体格や技のかけ方に苦戦し、2000 年のシドニー大会を最後に金メダルをとっていませんでした。ウルフ選手は得意の寝技で勝ち上がり、決勝の延長戦で韓国の

チョ・グハム選手を何とか下して優勝（左の読売新聞記事）。「僕は泥くさい試合しかできない。でもようやくメダルを取り戻せて良かったです」とのコメントを残しました。勝敗が決まった後、チョ・グハム選手がウルフ選手の袖をつかんで掲げました。「こいつが勝った。こいつを讃えろ」とでも言うように。小平の話を思い出すような一瞬だなあと感じました。素晴らしいスポーツマンシップです。チョ・グハム選手は韓国でも「よくやった」と讃えられたそうです。

■最後に攻めた岡本を担ぎ上げたライバルたち

スケートボードの女子パークという競技では、岡本碧優（みすぐ）選手がライバルたちに担ぎ上げられる感動的なシーンがありました。この時彼女は世界ランク１位でしたが、五輪の本戦では技がなかなか決まらず、最後の１本で攻めに出て、持っている中で一番の大技を出しました。しかし空中では成功しましたが着地に失敗し、メダル圏外の４位に終わりました。彼女がへたり込んで泣いていたところ、他の選手たちが駆け寄り、岡本を担ぎ上げて「よくやったよ」「最後惜しかったけどいい技だったよ」と励ましたのです。この行動は自然の発露です。スケートボードの選手たちは、お互いに交流しながら技を磨くそうです。一緒に練習をしたり、他の選手の家に泊まったり、動画を観たり。担ぎ上げられた岡本はだんだん笑顔になっていきました。フェアプレー賞にも選ばれたこのシーンは、私にとって東京大会の象徴のようにも思えました。

■「パパ！　私もカッパになりました」

パラリンピックの最年少日本代表選手で、背泳ぎで銀メダルを獲った山田美幸選手。彼女は両腕がなく、足の長さが違うので、泳ぐのはものすごく大変です。いろんなやり方を試みて自分のフォームを作り、さらにバタ足もうんと工夫をしてメダルにたどり着きました（右の読売新聞号外）。彼女はとても屈託のない笑顔で話をしますが、その言葉にはっとしたことがありました。彼女に「水泳をやったら」と言ってくれ、ずっと親身に導いてくれたお父さんが、東京大会の 2 年前にがんで亡くなりました。「お父さんに何て言いたい？」と記者に聞かれると、彼女はちょっと詰まって「パパはよく私に『お父さんは昔カッパだったんだよ』と言っていました。だから天国のパパに『私もカッパになりました』と伝えたいです」って言ったんです。これが山田美幸という選手の、本当の心の優しさなんだなと思いました。彼女はもらったメダルや花束を足で持ち上げ、嬉しそうな笑顔で喜んでいました。閉会式では片方の足で電動車いすのハンドルを動かし、支柱を使って国旗の角を持ち、手を振る代わりに肩をゆすって、本当に楽しそうに笑っていました。あの姿を見ていたら、「ああ、これなんだ」「人間ってこれでいいんだ」というのがすごく伝わってきたのです。

■何もかも含めて「かっこいい！」

ボッチャというのはとても奥の深い競技で、面白すぎるくらい技が巧妙です。選手たちのほとんどは脳性まひで、握力は弱く腕の筋肉も十分には動きません。そんな彼らが、正確無比なショットをどうやって繰り出すのか。そのボッチャで杉村英孝選手は念願の個人の金メダルを獲り、「スギムライジング」という流行語まで生まれました。彼の重ねてきた人生、練習、そして「頭をこう使うんだよ」と言わんばかりの戦略。どうやって攻めるのかなんて、私にはとても説明できないので、何かの折にぜひ観てください。ボッチャって本当に面白いなと何度観ても思います。

車いすバスケの日本男子はびっくりするくらいの活躍を見せ、銀メダルを獲得しました。鳥海連志選

手は本当はディフェンダーなのに、点も取りに行く、リバウンドも取る、ものすごいチェアワークで相手のディフェンダーを止めに行く。スーパサブみたいな動きをするんです。SNS では「鳥海さんかっこいい」といったコメントがあふれ、会場ではボランティアの若者たちも同じように讃えているのを目にしました。鳥海選手は両足がなく、手はそれぞれ変形しています。でもそれは鳥海選手の特徴というか一部なんです。そして彼のプレーを観た人たちは、彼の特性も含めてかっこいいと言う。活躍を観たその一瞬だけで人の心をつかまえ、違いというものを超えさせてくれるのです。

■感謝し、讃え、尊敬し合う選手たち

東京大会を振り返ると、選手たちが感謝し、お互いを讃え合う態度が、過去のオリンピックよりもよく見えた大会でした。コロナ禍で練習もままならず、国内大会や予選もなく、オリンピックが開かれるかどうかもはっきりしない。それでも開催を信じて練習を重ね、ようやく東京に集った選手たちが、「スポーツさせてもらえてありがとう」「ここにいられることが本当にうれしい」という気持ちになっての感謝です。それとライバル同士の心の交流。もちろん負けたら悔しいけれど、「よくやった」「お前とまた競えてよかった」と相手を讃えます。それぞれが乗り越えてきたものをお互いに知るだけに、尊敬し合う気持ちになるんだろうと思います。2 人の金メダルを出した男子走り高跳びを観ていたら、両陣営のスタッフや関係者が、どちらの選手が跳ぶ時も激励の手拍子をしていました。そういうシーンを経て、最後は「もういいじゃん」ということで金が 2 人になったんだろうと思いました。東京大会は「スポーツって何だろう」「オリンピックの原点って何だろう」という問いに呼応する何かを見せてくれたと思います。それはコロナだったからこそかもしれません。世界中が逆境にあったことが、人間性への洞察みたいなものをくれたように思うんです。逆境の中にあると分断が進むと言われますが、選手たちを見ていて、人間というのは繋がり合い、励まし合うこともできるんだ、人間にはまだいいところも残っていたんだとも教わりました。

８、国際社会の評価とパリ大会

■逆境の中約束を果たそうとした日本

東京大会は海外から非常に高い評価を受けています。「コロナ禍のもときちっとやり遂げてくれた」「逆境の世界に希望を与えてくれた」「日本でなければ開けなかった」。初めはお世辞かとも思いましたが、会う人みんなそう言うんです。パリ大会組織委員会のエスタンゲ会長は、「金メダルに値する」とまで称賛しました。「大会が大きく変容してしまうと分かっていながら、日本は一生懸命約束を果たそうとした」。世界はそう見てくれたのです。日本に対する信頼や好感度はずいぶん上がり、世界中に日本人に対する強い印象を与えたと思います。

■私たち自身がどう感じるか問われている

パリ大会までちょうど 1 年となり、国際オリンピック委員会が世界各国に招待状を発送しました。ロシアとベラルーシにはこの時点では送っていません。エスタンゲ会長は、「どんな暗い時代でもスポーツが人々の心をひとつにすることを、東京大会の開催は証明し、パリに道を開いてくれた」と話しています。パリ大会の開会式はセーヌ川で行われ、多くの人たちが無料で観ることができます。

エッフェル塔前広場の五輪モニュメント

オリンピック、パラリンピックというのは、ただのスポーツの祭典ではなく、理念を掲げたムーブメントでもあるのです。近代において、民間の運動で 100 年以上続いているものは他にはないと言われています。オリンピック憲章は「オリンピズムはスポーツを通じた人間形成。それにより社会をより良くし、平和を培う。そのための philosophy of life と定義します」とうたっています。要はスポーツを通

じて人間性を高めることがオリンピックの最大の目的なんです。これはギリシャ、クーベルタンの時代からの理念です。パラリンピックは、障害というものへの見方や認識の変革を目指す運動です。万人に違いがある中で、私たちはどう向き合うか、社会をどう変えるかが問われています。スポーツの価値とは、人々の心と身体を動かすことです。人々の心を触発することによって、豊かな生き方への一歩を示唆してくれることがあります。それを気づきとして得られるか、それを行動に移し社会の変化に繋げられるか、オリンピックやパラリンピックを社会にどのように生かしていくか。そうしたことは国とか政府ではなく、私たちがどう感じるかによって変わっていくと思います。

※掲載写真のうち出典が明記されていないものは Flicker の汎用写真です。

【質疑応答】

Q　東京大会でスポンサーなどから膨大なお金が集められましたが、それがどのように使われたのか教えてください。

A　国立競技場の建設などインフラの整備を含めると大変な金額になりますが、オリンピックの運営費だけを見るとそこまでではありません。インフラ以外では人件費など人間にかかる費用が相当あります。1年延期したことに伴う人件費増や、契約のやり直しで発生する追加の費用もありました。

Q　セクハラ問題が取り沙汰された橋本聖子さんが組織委員会の会長になった際、マスコミはどのような対応をしたのでしょうか。

A　橋本さんが会長に就任した時の記者会見で、その質問をぶつけており、彼女からその問題に対する回答、お詫び、今後への覚悟などが語られました。一部のマスコミはそれを報じています。ちなみに、この問題に対し高橋大輔さん側は追及しておらず、ご指摘のような刑事事件に至る要素はない。橋本さんが就任を打診された時、彼女は当初固辞しています。自分が任に適しているのかと、彼女自身が自問した末の決断だったと思います。

Q　東京大会をめぐる様々な汚職事件や談合事件が発生しましたが、将来のオリンピックやパラリンピックが改善されていく見通しはあるのでしょうか。

A　IOC はガバナンスの強化について口を酸っぱくして唱えています。第三者機関に査定をしてもらったり、倫理委員会を作ったり、各国のオリンピック委員会や国際競技連盟などに号令をかけたりしています。ただ IOC がコントロールできるのはオリンピックに関わる部分だけで、開催都市契約の範囲内でしか開催国への指導、監督を及ぼし得ません。私は IOC 会長との記者会見で、「こうした問題が起きるとすべての努力が水の泡になり、オリンピックのイメージが地に落ちてしまう可能性がある。それを防ぐために IOC は開催都市との契約の際、何らかの一札を入れたらどうか」と質問しましたが、直接の返事はありませんでした。人間性を向上させるという理念は掲げながらも、いまはロシアの問題などもあり、さまざまな側面で戦わなければならない状況に陥っているのはとても残念なことです。

結城和香子先生のプロフィール

１９６２年東京生まれ。筑波大学附属高校、東京大学文学部英語英米文学科卒。
１９８６年読売新聞入社、運動部、シドニー支局長、ロンドン支局員、アテネ臨時支局支局長、運動部次長を経て２０１１年から編集委員（現職）。国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）の取材を３０年近く担当。現地特派員として報じたシドニー、アテネ大会や、２０２０年東京大会など、１９９４年以降の夏季・冬季五輪１５大会と、夏季・冬季パラリンピック１０大会を取材。
スポーツ庁スポーツ審議会委員（３期）、横浜市スポーツ推進審議会委員。日本オリンピックアカデミー副会長。著書に「オリンピックの光と影　東京招致の勝利とスポーツの力」（中央公論新社）、共著に「報道記録 東京 2020 オリンピック・パラリンピック」（読売新聞取材班編、読売新聞社発行）など。